日 本 文 学

刘利国 编
陈 岩 审

北京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本文学/刘利国编著.-北京:北京大学出版社,1997.3

ISBN 7-301-03304-4

Ⅰ.日… Ⅱ.刘… Ⅲ.文学-概况-日本 Ⅳ.Ⅰ313.09

书　　名:　日本文学
著作责任者:　刘利国
责 任 编 辑:　许耀明
标 准 书 号:　ISBN 7-301-03304-4/Ⅰ.414
出　版　者:　北京大学出版社
地　　址:　北京市海淀区中关村北京大学校内　100871
电　　话:　出版部 62752015　发行部 62754140　编辑部 62752032
排　印　者:　北京市经纬印刷厂
发　行　者:　北京大学出版社
经　销　者:　新华书店
850×1168 毫米　32 开本　11.75 印张　270 千字
1996 年 11 月第一版　1999 年 4 月第三次印刷
印　　数:　9001—13,000 册
定　　价:　16.80 元

前　言

本教材是为日语专业学生编写的日本文学教材，并被指定为“辽宁省日语专业（本科）自学考试”文学课教材。

本教材是在“作为语言专业的文学教材”这一指导思想下编写的，因而更注意全貌、宏观。较之以往的教材，本书有以下几方面特点：一、选材时间跨度宽。书中所收既有古典文学作品，又有近、现代文学作品，时间跨度为1千几百年；二、文学样式全面。本书打破以往日本文学教材几乎只收小说的作法，广纳各种文学样式，收有散文、诗歌、小说、评论、和歌、俳句等；三、不出汉语注释。作为高层次的教材，本书所有解释一律不出汉语，目的是把思考留给学习者，使学习者在学习文学的同时提高语学能力，通过吃透词语捕捉作品的寓意。为方便学习者，本书每篇作品都附有作者介绍及词语注释，并对难读的词标注了假名。同时，为了扩大学生的阅读量，本书还选编了8篇阅读课文，供学生课外阅读。教师在授课时可以排除在外，不列入考试范围。阅读课文在目录上均做有△号标记，具体课目为第5、10、14、15、18、20、23、28课。

本书在编写过程中，得到了友好学校交换教师、日本北星学园大学教授田村信一、日本文教专家常国佳久先生的指导、帮助，北京大学出版社许耀明先生为本书付梓付出辛勤的劳动，在此一并致谢。

本书在选材、注释等方面恐有不当之处，诚望得到各方面的批评、指正。

编　者

1996年夏日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　録

第 1 課　ひとすじの道…… 1
第 2 課　月　夜…… 9
第 3 課　砂漠への旅 …… 16
第 4 課　友情について …… 24
第 5 課△言葉の意味 …… 30
第 6 課　美しい別れ …… 37
第 7 課　元日のこと …… 54
第 8 課　初秋海浜記 …… 62
第 9 課　美を求める心 …… 72
第 10 課△日本の耳…… 81
第 11 課　鳥…… 97
第 12 課　たこになったお母さん …… 115
第 13 課　水泥棒 …… 128
第 14 課△海と毒薬 …… 149
第 15 課△いとしのブリジット・ボルドー …… 175
第 16 課　伊豆の踊り子 …… 213
第 17 課　城の崎にて …… 234
第 18 課△赤ままの花 …… 243
第 19 課　こころ …… 255
第 20 課△忘れえぬ人々 …… 287
第 21 課　俳句 …… 306
第 22 課　和歌 …… 310
第 23 課△紀行文――おくのほそ道(抄録) …… 328
第 24 課　竹取物語 …… 347

第 25 課　平家物語 …… 351
第 26 課　徒然草 …… 354
第 27 課　方丈記 …… 361
第 28 課△枕草子 …… 364

第１課　ひとすじの道

東山魁夷（ひがしやまかいい）

ひとすじの道が、私の心に在った。

夏の①早朝（そうちょう）の、野の道である。

青森県種差（たねさし）海岸の、牧場でのスケッチを見ている時、その道が浮んできたのである。

正面の丘に灯台（とうだい）の見える牧場のスケッチ。その柵（さく）や、放牧（ほうぼく）の馬や、灯台をとり去って、道 だけを描いてみたら――と思いついた時から、ひとすじの道の姿が心から離れなくなった。

道だけの構図で描けるものだろうかと不安であった。しかし、道の他に何も描き入れたくなかった。現実の道のある風景でなく、象徴の世界の道が描きたかった。したがって、どこの道を描くというわけではないのだが、いろんな条件を考えてみると、やはり、種差牧場の道を手がかりにして構成するのが、まとまりがよさそうに思えるのだった。しかし、その牧場をスケッチしたのは戦前のことで、十数年も前のことである。はたして、あの道が、あのままの姿で、いまでも在るのだろうか。心細いことであった。

行っても無駄ではないか、何も、あの道にこだわることはないとも考えられた。昭和二十五年のことであるから、旅行事情もあまり良いとは云えない頃だったが、私の懸念は、そのことではなかった。最初の拠（よ）り処（ところ）となった現実の風景が、すっかり変ってしまっていた場合、せっかく心の中に形成されかかっている道

の影が、薄れてしまうのではないかと心配であった。

それでも、どうしても行ってみたくなった。東北本線が水害で不通になっていた時なので、[2]奥羽線で青森を廻って入戸に着いた。

種差海岸の牧場へ行くと、その道は荒れてはいるが、以前のまま牧場の中を通って、灯台の丘へと、ゆるやかに続いていた。

「来てよかった」と、ひとりごとを云って、私はその場に立ちつくした。

海へ傾斜している芝の[3]スロープの中に、その道は両側を雑草に[4]ふちどられて、まっすぐに、ゆるやかに上ってゆき、やや、右へ曲ろうとして、視野から消えている。そして、遠く向うの丘を、その続きと思える一線が横切っているのが見える。

しかし、十数年前のスケッチから、私の心の中に浮び上ってきた道と、この現実の道は、かなりの隔りはあった。大づかみな構図としては、この丘と道との組合せでよいように思えたが、いま、目の前にある道は、夏の陽に灼かれ、土も草も乾いていた。道の土の持つ落着きのある情感、両側の草と道との境の細やかな味わい、そういうものが失われていた。向うの丘の[5]スカイラインも、以前はゆったりとした線であったが、いまはその頂きに岩が露出している。十年の風雪が洗い出したものであろうか。戦争の荒廃の跡は、この、[6]みちのくの果ての牧場の道にも、あらわれていると思えるのだった。

私は、しっとりと潤いのある道が描きたかった。事情を話して牧場へ泊めてもらい、朝早く、まだ陽の登らぬうちに、この道を写生した。[7]市川へ帰ってきてからも毎朝、近くの川の堤の道を歩いて、露に濡れた草むらや、土の色を見ては参考にした。こうして、「道」の制作の準備を進めていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

道は、歩いて来た方を振り返ってみる時と、これから進んで行こうとする方向に立ち向う場合がある。私はこれから歩いて行く方向の道を描きたいと思った。ゆるやかな登り坂に向った時、私達には、これから、そこを歩いて行くという感じが起る。それに反して下り坂を見おろすと、いままでたどって来た道を振り返った感じになり易い。

この道の作品を描いている時、これから歩いてゆく道と思っているうちに、時としては、いままでにたどって来た道として見ている場合もあった。絶望と希望とが織り交った道、遍歴の果てでもあり、新しく始まる道でもあった。未来への憧憬の道、また、過去への郷愁を誘う道にもなった。しかし、遠くの丘の上の空を少し明るくして、遠くの道が、やや、右上りに画面の外へ消えているようにすると、これから歩もうとする道という感じが強くなってくるのだった。

人生を道にたとえるのは平凡である。しかし芭蕉が、あの不朽の紀行文に「奥の細道」と題したのは、その文中に、おくの細道の山際に云々の文があるところから、現実の道の呼び名でもあり、奥州地方の細々とした道の意味からでもあろうが、、辺鄙な地方の細々とした道をわけて旅行く自分の姿、芭蕉の人生観、芭蕉の芸術観の象徴として選んだ題名と云えるだろう。私も、いつも旅をし、旅を人生とも、芸術とも感じている人間であって、遍歴の象徴としての道は、かなり鮮明な映像となって、心に深く刻みつけられている。

私もいろんな道を歩いた。

早春の丘の道。あざやかな緑の縞模様を描く麦畑。まだ芽の出ない桑畑。遠くの嶺々には白い雪。[8]エメラルドの空に軽や

かな雲。

渓流に沿って、いくつもの寂しい山村を結び、杉木立の影を落す旧街道。石をのせた板葺き屋根。暗い部屋の中の蚕棚。梭の音。

ぶな、みずならの林の奥へと、落葉を敷きつめた道がある。やわらかな足裏の感触。落葉を踏む音。そこ、ここに白樺の幹があざやかに立つ。林の奥に明るい楓の朱色。

雪国の道。踏み固められたところを、ひろって歩く。橇が来る。すれちがいざまにわきへ寄ると、よろけて深い雪の中に踏みこんでしまう。若い女の頭巾の鮮やかさ。

軒下をきれいな水が流れる。古い小さな町。⑨連子窓の下に並べられた草花の鉢。壁のはがれ落ちた⑩土蔵に明るい⑪夕映え。暖簾。古風な看板。

都会の雨の舗道。飾り窓の華やかな灯りが⑫にじむ。地下室のバーから昇ってくるジャズの旋律。疲れた顔の人々。寂寞。

新しい美の字の徽章の学帽。うぐいすだにの駅から桜の花を踏んで、博物館のわきを通り学校へ通った道。

秋の夜。美術館の壁に貼り出された入選者発表。暗い中に人々のどよめき。初入選の喜びに、⑬宙に浮く足どりで坂下の郵便局へ、公園の道を走った——神戸の両親に電報を打つために。

城壁沿いに驢馬に乗った老人がやってくる。石橋の下で村の女達が布を棒で叩きながら洗濯をしている。白楊の並木が風にそよぐ熱河省承徳の道。

ローマ郊外のアッピア街道。廃墟と糸杉と傘松。⑭パウロがキリストのまぼろしを見た道。夏の雲。遠い雷。

古い[15]破風造りの家並み。時計台のある都門の塔の上に、[16]こうのとりの巣。広場の泉。馬車の蹄が夕闇迫る石畳の道に火花を散らして通り過ぎる。[17]バイエルンの古都。

召集令状を受けとりに、品川駅から灯火管制下の暗い街を、区役所へ歩いて行った雨上りの道。

まだ熱い瓦礫と、切れ落ちた電線、斃れた馬、黒い煙。日蝕のような太陽。空襲下の熊本市の道。

母の柩車を曳いて行った荊沢の道。風が強く新雪に輝く富士山が澄みきった空に浮んでいた——

道の思い出は尽きない。これからも、どんな道をたどることか。[18]シューベルトの歌曲集「冬の旅」は[19]ミュラーの詩によるものだが、全篇冬の道をたどる旅人の孤独な姿を描いて、人生の寂寥を歌っている。有名な「菩提樹」の歌も、この一連の詩、漂泊の冬の旅のさ中にあって、都門のそばの泉に立つ菩提樹の葉かげに、心の[20]休らう場があったことを回想する郷愁の歌である。また、「道しるべ」は、曠野をさまよう旅人が道しるべを見出すが、それは何人も再び還ることのない道を示している。最後に旅人は「宿」に来る。墓場である。宿のしるしは、葬いの青い花であり、その冷たい臥床に疲れた身を休めようとする。しかし、宿の[21]あるじに拒絶されて、ふたたびさまよって行く。この道は絶望の果ての冬の道である。私は冬の道を経て、ようやく、初夏の朝露を含んだ草原の道に立ち向おうとしている。

「道」をその年の秋、第六回[22]日展へ出品した。竪長の画面の、ほぼ中央に、やや、ピンク色がかったグレーの道、左右の叢や丘は青緑色、空は狭くとり、青味がかったグレーにした。

この三つの色の分量の対比を考えた。出品作としては、ずいぶん小さい画面であるが、これ以上大きくすると画面の緊密感がうすれると思った。小さ目の画面を充実させることが、この絵の場合、必要であると考えた。

こつこつと積み上げるような丹念な描き方で仕上げて行った。

この年、はじめて日展の審査員になり、この「道」の出品作は多くの人々の共感を得て、画壇的にも世間的にも認められるようになった。

人生の旅の中には、いくつかの岐路(きろ)があり、私自身の意志よりも、もっと大きな他力に動かされていると、私はこの本のはじめの章に書いている。その考え方はいまも変らないが、私の心の中に、このひとすじの道を歩こうという意志的なものが育ってきて、この作品になったのではないだろうか。いわば私の心の[24]据(す)え方、その方向というものが、かなり、はっきりと定まってきた気がする。しかし、やはりその道は、明るい烈(はげ)しい陽に照らされた道でも、陰惨(いんさん)な暗い影に包まれた道でもなく、早朝の[25]薄明(はくめい)の中に静かに息づき、坦々として、在るがままに在る、ひとすじの道であった。

【作者紹介】 東山魁夷(ひがしやまかいい)(1908～　)。日本画家、随筆家。横浜市生まれ。本名新吉。東京美術学校日本画科に在学中，二回帝展に出品し，1931年同校を卒業。1933年～35年渡欧し，第一回日独交換留学生としてベルリン大学哲学部美術史科に学ぶ。帰国後，官展を中心に活躍。つねに風景画にとりくみ，純度の高い澄んだ近代画境を追求している。日本芸術院会員。1969年文化勲章受章。代表作「残照」「道」「朝明けの潮」ほか。随筆に「わが遍歴の山河」「風景との対話」などがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

【語釈】

①早朝/朝早いころ。早暁(そうぎょう)。明け方。

②奥羽線/奥羽本線。東北地方の裏日本側を 縦貫 する国鉄線[現在はJR 線]。福島・秋田・青森を結ぶ。長さ487キロメートル。

③スロープ/傾斜。斜面。

④ふちどる/物のふちに細工をほどこす。ふちに色のちがう線を引いたりひも状のものをつけたりする。ふちをつける。

⑤スカイライン/空を背景として見た時の山、建物などの輪郭線(りんかくせん)。

⑥みちのく/《名》「みち(道)のおく(奥)」の約。もと、今の東北地方(奥羽地方)全体をばくぜんとさした。

⑦市川/千葉県西端(せいたん)の市。東京の東に隣接する衛星都市。

⑧エメラルド/あざやかな緑色をした緑柱玉(りょくちゅうぎょく)。緑玉石(りょくぎょくせき)。

⑨連子窓/れんじをとりつけ(内側に障子などをはめ)た窓。「連子」は、窓・欄間(らんま)などに、たてまたは横に一定の間隔をおいてとりつけた桟(さん)。

⑩土蔵/壁を土やしっくいで厚くぬりかためた、くら。つちぐらとも読む。

⑪夕映え/夕日の光で、空などが赤く照りかがやくこと。夕焼け。

⑫にじむ/物の輪郭がぼやけて広がる。

⑬宙に浮く/地に立たずに空間にうかぶ。

⑭パウロ/キリスト教をローマ帝国に普及するのに最も功の多かった伝道者。もと熱心なユダヤ教信者であったが、復活したキリストに接したと信じて回心し、生涯を伝道に献げ、64年頃ローマで殉教(じゅんきょう)。

⑮破風造り/日本建築の屋根の造りの一つ。屋根の端につけた山形の板。

⑯こうのとり/こうのとり科の鳥。羽毛は大部分白色、羽は黒色で、足が赤い。巣は木の上に作り、かえる・魚などを食べる。

⑰バイエルン/ドイツ南部の州。農耕・牧畜・鉱業が盛んで、ビール醸造(じょうぞう)は世界的である。

⑱シューベルト/(1797～1828)オーストリアの作曲家。豊富な旋律による抒情味と簡素な優美さとで知られる。歌曲集「美しき水車小屋の娘」

「白鳥の歌」「冬の旅」をはじめ、600余の珠玉(しゅぎょく)のような歌曲の外、交響曲(こうきょうきょく)・室内楽(しつないがく)などを作曲。

⑲**ミュラー**/(1794～1827)ドイツ後期ロマン派の詩人。シューベルトの「美しき水車小屋の娘」などの作詞者。

⑳**休らう**/休む。休憩する。

㉑**あるじ**/主人。所有者。

㉒**日展**/美術団体の一つ。また、その主催する総合美術展覧会。毎年秋季に展覧会を開催。

㉓**据え方**/置き方。

㉔**薄明**/[明け方・夕方の]うすぼんやりとした明るさ。

第2課　月夜

瀬戸内晴美

今年の中秋の名月は、①嵯峨では雲ひとつなく、②まばゆく輝き、澄みきっていた。

一年なじんだお手伝いの少女が、明日は恋人の許に帰っていくという前夜なので、夜更けて、月を見て歩いた。

早い時間だと、月見の客が車でうるさいだろうと、すっかり月が③中天に上りきってから、九時すぎて出かけたのに、嵯峨の道という道は、車と人で埋まっていたのには愕かされた。

④大覚寺の大沢池では、毎年月見の宴を開いて、⑤竜頭鷁首の船を浮べ、王朝のように管弦を奏して名月を愉しむのだが、新聞を見ると、⑥待宵の月見は大覚寺では五千人の人出で、名月の夜は七千人の人があふれたという。私も一昨年だったか、大覚寺へ出かけて⑦芋を洗うような混雑に怖れをなして逃げ出した。

日本人は風流だなあとつくづく思う。花が咲いたといえば⑧嵐山に五万人の人が出、紅葉が色づいたといっては⑨高雄が人で埋まってしまう。花も紅葉も人間に圧倒されて、息も出来ないように見える。その人込みを見ると、本心から、花や月や紅葉を観賞したいのだろうかと疑わしくなる。

車が⑩ひっきりなしに明るいヘッドライトを光らせて通る夜道の端を、⑪きゃしゃな月見提灯の乏しい火を⑫かばいなが

ら、徒歩の月見客が歩いている。

もうすっかり人の気配もなくなった大覚寺の門前を通りすぎ、広沢池のほとりへ出ると、ここにはまだ、月見の人があちこちにたたずんでいた。あんまり着馴れていない和服をきゅうくつそうに着て、赤ん坊を夫に抱かせた若い人妻が、丸い頬に月の光を受けながら、[13]一心に空を見あげているのが[14]ほほ笑ましく美しい眺めだった。月が上りすぎ、池には映っていないが、池の面は月光にきらめき、遍照寺山がくっきりと影を落している。もうボートの客は帰ってしまっていて、池は月光だけが渡っているのが[15]森閑として、やはり嵯峨の月夜だと思う。

嵐山に廻ると、ここにもまだ月見の客が残っていた。

渡月橋の真中に立つと、丁度、月は川下の森の上に輝き、川波がきらきら光る。川面の葦も、堤もくっきりと浮び上っている。月光をとかした水が、水の中で最も美しいものだろうと、あらためて川面に眺めいる。

ここは[16]アベックが多い。あんまり若くない、三十歳前後のふたりづれが目立つ。こんな遅い時間に名月を眺めに嵐山まで来て、人の去るのを待つ風流心は、その年ごろの人に一番多いのかと思う。

月を見てしゃべる人はあまりいない。花見の客が酔っていたり、高笑いしたり、はしゃいで[18]喋りちらすのと対照的で、まことに静かである。

こんな名月は見たことがないと、つれの少女がいう。彼女の恋の前途は決して楽観を許さないのだけれど、若さがどんな苦境も克服していくだろうと、私は[19]あえて彼女の出発を引き

とめようとはしていない。

「思いだすでしょうね、きっと、毎年」

彼女はひとりごとのようにつぶやいている。

私は籠に、[20]芒(すすき)、[21]萩(はぎ)、[22]女郎花(おみなえし)、[23]吾亦紅(われもこう)、[24]桔梗(ききょう)などを、わが庵(いおり)の庭や、野の道から摘(つま)んで来させて活(い)けさせた。どの少女たちも、月見の夜、秋の花をつんできたり、籠にいけたりして、月見団子(だんご)や、栗や芋をそなえる月見の台をつくる時は、熱心になって[25]はりきっている。

嵯峨の月見団子は白い餅(もち)の頭をちょっぴりだし、外はあんこでくるんだ小鼠(こねずみ)みたいな形をしている。まるい白い団子の方が盛りやすいので、それはないかというと、

「京都の月見団子いうたらこれどす。名月は芋名月[26]どっしゃろ」

と、菓子屋の主人は昂然(こうぜん)という。嵯峨に来て、この[27]きぬかつぎ型の団子にもすっかりなじみになってしまった。

毎年、そうなのだが、嵯峨野を廻って、あらゆる場所から月を眺め、帰って寂庵(じゃくあん)の庭から仰ぐ月が、結局は最も美しい。

嵯峨で、こんな月見にいい場所はまたとあるまいと思う。

待宵の夜は、今年は旅の帰途、故郷に立寄って、姉の住む徳島の紅葉山から月を仰いだが、背後(はいご)に山が連っていて、前方に畠(はたけ)のひらけた嵯峨に似た地形なので、そこの月も[28]こよなく[29]冴(ひや)やかで美しかった。それでも姉は、

「寂庵の月はどんなにいいだろう」

と、嵯峨に想いを[30]はせて羨ましがっていた。

丁度、庭の真中で天心の月を仰ぎ、心が月のように無心になっていた時、電話が鳴った。東京の従妹(いとこ)からで、彼女が姉妹のよう

にしていた彼女の従妹が昨夜自殺したという報せが入ったという。私はその人の子供の頃逢ったきりだが、幼児(ようじ)ながら、美しさのきわだった子で、どんな美しい女(ひと)になるだろうと思ったのを覚えている。

結婚を二度して、子供を五人残し、自殺しなければならなかった四十八歳の女の心のうちを思いはかり、私はまた月を眺めに庭へ出た。

「もう心細くて……お願いだから、生きていてね」

気の弱い従妹は、なぜか、私が自殺するのではないかという[31]強迫観念(きょうはくかんねん)に[32]とりつかれているのだ。私は笑っていった。

「わたしは大丈夫よ。それより、東京の月はどう?」

「今、部屋から見えないから、屋上に行ってみようと思うてるところ」

かつて、私もそこに住んでいた都心の高台のマンションに住む従妹が、エレベーターに乗り、屋上に運ばれていく姿が月の面にくっきり描かれてくる。

人は別れるために逢(あ)い、死ぬために生れてくる。

私の許に十数人の少女が波に打ちよせられる[33]桜貝(さくらがい)のように寄ってきては、[34]巣立(すだ)っていく。十年いた子も、三ヵ月で帰る人もいる。

私は一度も、彼女たちの出発を止めたことはない。立ち去っていっても必ず、また顔を見せに来てくれる彼女たちとの縁は、切れたことがない。

立ち去ったまま、行方の知れなくなった人が一人いる。私は月を仰ぎ、彼女のことを祈っていた。月見の台をいそいそとつくっていた彼女の姿が目に浮んでくる。

彼女とも、嵯峨野を歩いて月を見た。それからほどなく、この